

## 日本の鯨類漁業ならびに鯨類の生態や資源管理に関する書籍

粕谷俊雄

鯨類を捕獲する日本の漁業の歴史と現状、その資源管理・保全生物学等に関する参考書を紹介する。原則として高度に専門的・技術的な書籍や定期刊行物をさけて、なるべく日本語の一般書を選択したが、引用文献をたどることで、さらに高度な内容の文献に達することも可能である。配列は発行年代順とした。

### 1. 鯨類漁業の歴史 (1945 年以前の生物学書を含む)

山瀬春政 1760. **鯨志**. 摂陽書林. 27 丁. 日本で最初に刊行された鯨書で、14 種を図示し解説を付す。1944 年に朝日新聞社から日本古典科学全書の 11 巻に復刻され、この復刻版も復刻されている。

大槻清順 1808 (校本). **鯨史考**. 鯨種の説明、解剖学、内外の捕鯨地と捕鯨組織、捕鯨方法、鯨の加工と用途を記述。国内の当時の捕鯨事情を知る好著。1983 年の恒和出版江戸科学古典全書の 2 巻に復刻された。

小山田與清 1832. **勇魚取絵詞、附鯨肉調味方**. 豊屋蔵版. 本編は上巻 20 丁、下巻 20+3 丁、付録の鯨肉調味方は 30 丁。九州生月の捕鯨実況を図示。当時の捕鯨の様子を知る好著。1944 年に朝日新聞社から日本古典科学全書の 11 巻に復刻され、この復刻版も復刻されている。

Scammon, C.M. 1874. **The Marine Mammals of the North-western Coast of North America**. J.H. Carmany. 319+V 頁. 東部北太平洋の海産哺乳類の生態と捕鯨業を記述した名著。1968 年の Dover Publication 版を含め、いくつかの復刻版がある。

服部徹 (編) 1887-1888. **日本捕鯨彙考**. 大日本水産会. 前編 110 頁、後編 210 頁. 13 鯨種、鯨の解剖学、捕鯨事業など、当時の知識を集大成した。1880~1883 年の捕獲統計がある。2002 年に鳥海書房により復刻された。

松原新之助 1896. **捕鯨誌**. 高山房. 298+10 頁. 当時すでに旧式となっていた帆船捕鯨を紹介したので日本の捕鯨業への貢献はほとんどなかった。1882~1891 年の県別・鯨種別の捕獲統計はありがたい。

明石喜一 1910. **本邦の諾威式捕鯨誌**. 東洋捕鯨株式会社. 280+40 頁. 19 世紀末の日本のノルウェー式捕鯨の創始から、捕鯨会社乱立を経て、東洋捕鯨への統一までを記述。1989 年に明治期日本捕鯨誌と改題してマツノ書店により復刻された。

- 馬場駒雄 1942. **捕鯨**. 天然社. 326 頁. 日本におけるノルウェー式捕鯨を記述。捕鯨規制や鯨の保護に関して非捕鯨国が介入するのは不当であるとか、鯨族減少の中で我が国捕鯨業が生き残れば合理的な資源管理ができるなどの記述に当時のやや独善的な雰囲気を感じる。
- 大村秀雄・松浦義雄・宮崎一老 1942. **鯨—その科学と捕鯨の実際**. 水産社. 319 頁. 鯨の生物学、捕鯨業の歴史と技術の現状、鯨の利用を述べる。戦前の捕鯨規制に向けた諸外国の動きと日本の対応の記述は参考になる。
- 伊豆川浅吉 1943. **土佐捕鯨史**. 日本常民文化研究所. 上巻:1-310 頁、下巻:311-668 頁. 江戸時代初期の突取捕鯨から、網取捕鯨を経て、明治末年のノルウェー式捕鯨までについて、捕鯨方法、捕鯨組織、経営を記述。
- 笠原昊 1950. **日本近海の捕鯨業とその資源**. 日本水産株式会社研究所報告第 4 号. 103 頁+付図 51 頁. 日本沿岸で捕獲される大型鯨の漁期、捕獲物組成、漁業の動向を解析。1911~1949 年の海区別・鯨種別の捕獲統計は貴重。
- 前田敬治郎・寺岡義郎 1952. **捕鯨、附日本の遠洋漁業**. 水産週報社. 450 頁. 大村ら (1942) に戦後の捕鯨事業を追加したような内容。小笠原母船式捕鯨と再開南氷洋捕鯨の記述は役に立つ。1958 年に増補版が出た。
- 橋浦泰雄 1969. **熊野太地浦捕鯨史**. 平凡社. 662 頁. 付録として日本の捕鯨絵図の復刻がつく。太地の捕鯨の歴史を主体とするが、太地は日本の主要捕鯨地であったし、17 世紀以降の各地の捕鯨に関する記録を記載しているので役立つ。
- Tonnessen, J.N. and Johnsen, A.O. 1982. **The History of Modern Whaling**. University of California Press. 798 頁. ノルウェー式捕鯨の歴史をノルウェー人の視点から書いている。この技術の創始から、世界の海への展開を経て、IWC が 1975 年に始めた新管理方式 (New Management Procedure) で捕獲枠が大幅に削減されるまでを記述。捕鯨規制に対する各国の対応を知るのに便利。
- 多藤省徳 1985. **捕鯨の歴史と資料**. 水産社. 202 頁. ノルウェー式捕鯨会社の設立、統合、日本による海外の捕鯨事業、捕鯨規制、捕獲統計など。出漁規模や捕獲頭数に関する統計は便利。
- 板橋守邦 1987. **南氷洋捕鯨史**. 中央公論社. 233 頁. ノルウェー式捕鯨の開発から 1934 年の日本の南氷洋捕鯨参入、捕鯨規制、三人委員会の働きをへて商業捕鯨停止までを記述。
- Francis, D. 1990. **A History of World Whaling**. Viking. 287 頁. 12 世紀のバスク捕鯨から北大西洋・北極圏捕鯨、南海捕鯨、北太平洋捕鯨、ベーリング・北極海捕鯨、ノルウェー式捕鯨の展開を経て商業捕鯨停止までをわかりやすく解説。日本の古式捕鯨については触れていない。内容はそのまま、タイトルを **The Great Chase** と変えてペンギン文庫からペーパーバックが出ている。

- 森田勝昭 1994. **鯨と捕鯨の文化史**. 名古屋大学出版会. 421+24 頁. 人間と鯨の関係を世界史規模で眺めた。世界各地における鯨と人間の出会い、捕鯨の発生、捕鯨が社会に及ぼした影響、捕鯨文化の交流などを文献引用により通観。
- 鳥巢宮一 1999. **西海捕鯨の史的研究**. 九州大学出版会. 414+38 頁. 記述は江戸初期から明治期にかけての福岡県・長崎県方面の捕鯨事業に偏るが、北九州の捕鯨は太地・高知のそれと並んで日本の古式捕鯨を代表する一つである。多くの古文書を引用してその実態を描いた努力を評価する。
- 大村秀雄・粕谷俊雄 2000. **南氷洋捕鯨航海記—1937/8 年揺籃期捕鯨の記録**. 鳥海書店. 203 頁. 南氷洋捕鯨に水産庁から監督官として派遣され、帰途にはロンドンで開催された捕鯨会議に日本代表の顧問として出席して、翌年 8 月に帰国するまでの 10 カ月あまりの日記。当時の捕鯨の事情を垣間見ることができる。
- 山下渉登 2004. **捕鯨**. 法政大学出版局. I : 287+5 頁, II : 295+5 頁. 11 世紀にさかのぼるといふバスク捕鯨から 20 世紀末の近代捕鯨末期までの捕鯨の動向と国際政治の動きを諸書を引用しつつ記述している。近年の孤立した日本の捕鯨政策の問題点を指摘する視点は新鮮である。
- 小島孝夫 (編) 2009. **クジラと日本人の物語—沿岸捕鯨再考**. 東京書店. 255 頁. 数名の分担執筆で、各地の捕鯨の歴史、鯨やイルカの利用、祭りなどの民俗。ホエールウオッチングを捕鯨産業の延長と位置付けた視点は日本では珍しい。従来の「網取捕鯨」を「網掛突取捕鯨」と名付けたのは、描写的名称を好む今の風潮だろうか。
- 粕谷俊雄 2011. **イルカ—小型鯨類の保全生物学**. 東京大学出版会. 640 頁. 本書の主要テーマは保全生物学であるが (後述)、日本のイルカ漁業とその歴史についてもまとまった記述がある。
- 福岡昇三・粕谷俊雄 2014. **網走の小型捕鯨—追鯨士の記録 (1971 年～1974 年)**. 生物研究社. 148 頁. 毎日の捕鯨船の行動を分単位で記録した日記。ミンク船とも呼ばれた小型捕鯨船の日々の操業の姿を知る好著。

## 2. 捕鯨論争

- 原剛 1983. **ザ・クジラ**. 文真堂. 335 頁. 捕鯨管理の歴史、資源管理の問題点、孤立した日本の捕鯨政策などの国民の目につきにくい捕鯨業の暗部の記述は貴重。捕鯨批判の視点から書かれている。
- 北原武 1996. **クジラに学ぶ—水産資源をめぐる国際情勢**. 成山堂. 233 頁. 鯨の生物学に加えて、捕鯨の歴史、鯨利用の歴史、鯨資源管理の歴史、水産資源管理に関

する日本と欧米の視点等。水産資源管理の問題を含め、広い視野から鯨問題を眺めている点で評価する。

近藤勳 2001. **日本沿岸捕鯨の興亡**. 三洋社. 449 頁. 日本の沿岸捕鯨を 16 世紀から 1988 年 3 月の商業捕鯨停止までを記述。戦前の捕鯨に関する記述は先行書の再構成が多いが、戦後の操業に関しては著者の所持する資料や経験に基づくものと思われる。マッコウクジラなどの密漁に関する事実を当時の捕鯨事業の担当者が明らかにしたことは貴重である。

小松正之 2001. **くじら紛争の真実—その知られざる過去・現在、そして地球の未来**. 地球社. 326 頁. 日本の捕鯨業者と捕鯨担当の水産庁職員の立場から書かれた捕鯨論。世界のイルカ漁と捕鯨の現状、国際捕鯨委員会と鯨資源の管理、商業捕鯨停止の経緯、水産庁主導の鯨類研究と日本の調査捕鯨のありさま。掲載されている統計や歴史的事実は役に立つ。証明を待つ仮説と証明された事実との区別があいまいな点には警戒が必要。

渡辺洋之 2006. **捕鯨問題の社会歴史学—現代日本におけるクジラと人間**. 東信堂. 222 頁. しばしば観念的で一方的な主張に終わりがちな捕鯨と日本人の関係論を、努めてデータに基づいて科学的に解析しながら論じた好著。

石井敦 (編) 2011. **解体新書「捕鯨論争」**. 新評論. 322 頁. 5 名の著者による分担執筆。捕鯨問題の歴史的展開と IWC の現状、調査捕鯨の科学性、日本のマスコミの報道姿勢、日本の捕鯨外交と隠れた目的、グリーンピースの実態などを引用文献を示しつつ紹介。日本の行政・業界の捕鯨対応を批判的にみる姿勢で貫かれている。

### 3. 鯨類の科学と管理 (1945 年以前の出版を除く)

細川宏・神谷敏郎 (訳) 1984. **鯨**. 東京大学出版会. 440 頁. Slijper 著の **Whales** (Hutchinson, London. 1979 改訂版. 511pp.) の翻訳。鯨類の進化、分布、生理、栄養、感覚、繁殖、捕鯨などを扱う。1962 年に英訳の初版が出たときには鯨学を目指す若者のバイブルとなった。今でも鯨の入門書として役立つ。

大隅清治 (訳) 1984. **鯨とイルカの生態**. 東京大学出版会. 450 頁. Gaskin 著の **The Ecology of Whales and Dolphins** (Heinemann, London. 1982. 459pp.) の翻訳。シュライパーの「鯨」の後の 20 年間の学問の進歩をとりこんだ良著。鯨学の入門書として勧める。

宮崎信之 1992. **恐るべき海洋汚染—有害物質に蝕まれる海の哺乳類**. 合同出版、東京. 190 頁. 内容はタイトルのごとし。

- 粕谷俊雄・山田格 1995. **日本鯨類目録**. 日本鯨類研究所. 90 頁. 日本産鯨類の和名の変遷を知るのに便利。
- 日本哺乳類学会 1997. **レッドデータ 日本の哺乳類**. 文一総合出版. 279 頁. 日本産哺乳類の全種について IUCN の基準によって、個体のレベルを絶滅、絶滅危惧、危急、希少、普通、不能などに分類し、その根拠を示した。鯨類 (139~185 頁) は粕谷・宮崎が担当。
- 桜本和美 1998. **漁業管理の ABC-TAC 制がよくわかる本**. 成山堂書店. 200 頁. 難しそうな漁業資源管理の原理を判り易く説明している。
- 白木原国男・岡村寛・笠松不二男 (監修) 1999. **海産哺乳類の調査と評価**. 日本鯨類研究所. 165 頁. Garner, G.W.等による **Marine Mammal Survey and Assessment Methods** (Balkema, Netherlands. 1999)を監修者を含む数名で分担して翻訳した。目視調査により鯨類の生息頭数を推定する手法・理論・問題点などを扱う。
- Reeves, R.R., Stewart, B.S., Clapham, P.J. and Powell, J.A. 2002. **Guide to Marine Mammals of the World**. Alfred A. Knopf, New York. 527 頁. 海産哺乳類を 1 種につき 4 頁をつかい、外形と分布図をつけて形態、行動、繁殖、摂餌、保全等を解説。
- National Research Council 2003. **Ocean Noise and Marine Mammals**. National Academies Press, Washington, DC. 192 頁. 海中の人工騒音が海産哺乳類におよぼす影響を一般向けに解説 (英文)。
- 藤瀬良弘・田村力・坂東武治・小西健志・安永玄太 2004. **イワシクジラとニタリクジラ**. 日本鯨類研究所. 168 頁. 日本鯨類研究所が調査捕鯨で得た捕鯨ならびに目視データに基づいて、北太平洋のイワシクジラと沖合系のニタリクジラについて、その分布、形態、繁殖、餌料等を比較した。用いた資料は 1994~2003 年であるが、資料数や年度はデータによってまちまちであるらしい。
- Berta, A., Sumich, J.L. and Kovacs, K.M. 2006. **Marine Mammals: Evolutinary Biology (2nd ed.)**. Elsevier. 517pp.+16plates. 海産哺乳類全般をカバー。解剖、生理、繁殖、摂餌、社会構造、コミュニケーションなどを進化的観点から解説し、利用と保全などについて記述。大学生あるいは大学院生の読み物として好適。
- 加藤秀弘 (編) 2008. **日本の哺乳類学- 3、水生哺乳類**. 東京大学出版会. 293 頁. 分担執筆者が得意とする分野を思いおもいに執筆している。鯨類の起源と最近の遺伝学的手法、四国・鹿児島沖の沿岸性のニタリクジラ、北海道のアザラシ・アシカ類と漁業被害、イシイルカの個体群、日本周辺鯨類の資源量調査、企画者の立場から見た日本の調査捕鯨、沖縄のジュゴン等。

- 村山司 (編) 2008. **鯨類学**. 東海大学出版会、秦野市. 402 頁. 聴覚、移動と回遊、餌料、社会構造、認知能力、化学汚染、ホエールウォッチング、進化、解剖学を扱っている。
- Ohdachi, S.D., Ishibashi, Y., Iwasa, M.A. and Saitoh, T. (eds) 2009. **The Wild Mammals of Japan**. Shoukado, Kyoto. 549 頁. 水生種を含む日本産哺乳類を種ごとに形態・分布・生活史などを写真を用いて簡潔に記述している (英文)。最近 2 版がでた。
- Perrin, W.F. ほか (編) 2009. **Encyclopedia of Marine Mammals**. Academic Press, Amsterdam. 1316 頁. 第 2 版. これ 1 冊あれば海産哺乳類のことは大抵わかる (英文)。
- 大隅清治 (監修) 2009. **鯨とイルカのフィールドガイド**. 東京大学出版会. 168 頁. 日本周辺の鯨類の洋上識別の手引き。
- 粕谷俊雄 2011. **イルカ—小型鯨類の保全生物学**. 東京大学出版会. 640 頁. 日本で漁獲されている小型歯鯨類 9 種のうち 7 種 (スナメリ、イシイルカ、スジイルカ、ハンドウイルカ、コビレゴンドウ、ツチクジラ、カマイルカ) につき分布、成長、繁殖、生息数、漁獲統計を含む漁業の動向や管理の問題点などを詳述。最終章では未解明の生物学的課題、資源管理の失敗例 (スジイルカとマッコウクジラ) とその背景、科学者のあるべき姿を提示。イルカ漁業の歴史や漁業規制の歴史も記述。小型鯨類の保全に関心のある者の必読。